

## (6) 屋久島地域

### ア 概況

本地域は、県本土の南方約60km、種子島の南西18kmに位置する屋久島(504.89km<sup>2</sup>)と、その西北西約12kmに位置する口永良部島(35.77km<sup>2</sup>)の2島からなっている。行政区域については、上屋久町、屋久町の2町に分かれ、口永良部島は上屋久町に属していたが、平成19年10月1日に合併し、現在は2島で屋久島町を構成している。

### イ 自然

屋久島は、九州最高峰宮之浦岳(1,936m)をはじめ千メートル以上の高峰45座を擁する山地が大部分を占める円形の島で、山裾は西部海岸では急斜面をなして海岸に臨んでおり、東部海岸は海岸線から約2kmの幅で海岸段丘状がとりまいている。

口永良部島は、霧島火山帯に属し、島の東南部の中央には新岳(657m)が火山活動を続けており、島全体が火山性土壌に覆われている。

気候は、海岸部は黒潮の影響を受け温暖であるが、屋久島の山頂部は積雪があるなど極めて変化に富んでおり、亜熱帯から冷温帯に至る植生の垂直分布が見られる。夏秋季には台風に見舞われ、冬季の季節風も強い。

また、屋久島は、国の特別天然記念物に指定されている「屋久島スギ原始林」等優れた自然環境が世界的にも高い評価を受けており、平成5年12月世界遺産条約に基づく自然遺産として登録されている。

### ウ 沿革

屋久島は「益救島」とも呼ばれ、古代大和国家時代から既に中央との接触をもっていたと考えられる。屋久島の森林資源の沿革については、寛永年間に、藩儒泊如竹翁の進言したことにより、宮之浦に郡司が置かれ、一種の林政が行われ、貴重な資源として屋久杉の伐採が始まった。その後は島津藩の直轄領地として明治時代を迎えている。

明治19年には、屋久島は、鹿児島大林区署の管轄下に置かれ、大正13年には、屋久島営林署が設置された。本格的な官行伐採が始まり、その後の屋久島の開発は、営林署事業の盛衰によって大きな影響を受けた。その間、営林署により永田～宮之浦～安房～栗生間の併用林道が設置され、それが現在の屋久島循環線の基となっている。

人口は、平成22年国勢調査では13,589人(うち口永良部島152人)である。人口動向は、昭和60年15,074人、平成2年13,860人、平成7年13,595人、平成12年13,875人で、増減率は、昭和55年から昭和60年が3.5%減、昭和60年から平成2年が8.1%減、平成2年から平成7年が1.9%減、平成7年から平成12年については2.1%の増加に転じ、平成12年から平成17年については0.8%の減、平成17年から平成22年については、1.2%の減となっており、近年は横ばいの傾向にある。

また、昭和47年に本地域及び種子島地域をもって設置された熊毛広域市町村圏協議会は平成23年度末に解散し、一部事務を種子島屋久島振興協議会へ引き継いだ。



## エ 交通・通信

本土とを結ぶ交通体系については、鹿児島～屋久島の定期航路と鹿児島空港～屋久島空港〔40分、1日6便〕、大阪国際空港～屋久島空港〔約95分、1日1便〕、福岡空港～屋久島空港〔約65分、1日1便〕の定期航空路がある。

また、本地域と種子島との間に口永良部島～宮之浦～種子島（島間）と屋久島（宮之浦，安房）～種子島（西之表）の定期航路がある。

### 航路現況

平成25年4月1日現在

航路	船舶名	航路距離(km)	所要時間	運航回数	トン数(t)	旅客定員(人)
鹿児島～宮之浦	フェリー屋久島2	135.0	4:00	1/1日	3,392	250
鹿児島～宮之浦	高速船 「トッピー」 「ロケット」	(直行便)	1:45	1.5/1日	トッピー2 163 トッピー3 164 トッピー7 281 ロケット 165 ロケット2 164 ロケット3 164	263 238 259 247 247 247
		(指宿・西之表経由)	2:00～2:40	2.5/1日		
鹿児島～安房		(直行便)	2:00	0.5/1日		
		(西之表経由)	2:35	1.5/1日		
西之表～宮之浦		55.0	0:50	2/1日		
西之表～安房		57.0	0:50	1.5/1日		
島間～宮之浦	フェリー太陽	30.0	1:05	1/1日	499	100
宮之浦～口永良部		45.0	1:40	1/1日		

島内交通は、屋久島については主要地方道が海岸線に沿って島を一周しており、バス事業者の運行する定期路線バスが地域住民や観光客等の交通手段として運行している。また、屋久島の主要観光地であるヤクスギランド、紀元杉等へ通じる一般県道屋久島公園安房線や自然休養林白谷雲水峡へ通じる県道白谷雲水峡宮之浦線についても屈曲箇所、幅員狭小区間が大半であるため整備を要するところが多い。

港湾・漁港は22港あり、逐次その整備が進められている。

また屋久島空港は、DASH8-400型機対応の滑走路(1,500m)が整備されている。

情報通信基盤については、屋久島と本土の間は、海底光ケーブルが敷設されており、口永良部島と屋久島の間は無線で接続されている。なお、本地域内には、光ファイバによるネットワークは構築されていない。屋久島は、ADSLサービスが提供されているが、電話交換局からの距離が長いことにより、電気信号の減衰のため、本来のADSLサービスが利用できない地区がある。また、口永良部島は、電話回線を利用したISDNのサービス提供エリアになっているが、ADSLサービスは提供されていない。

携帯電話については、サービスエリアになっているが、一部に不感地域が存在している。

テレビについては、地上波テレビ放送のデジタル化に対応するため、既存の共聴施設の改修やCATVのデジタル化対応を行った。また、一部に「新たな難視」地区が発生していたが、共聴施設の新設や高性能アンテナの設置等により解消されている。

新聞は、午後に配達されるが、荒天で船便が欠航になり遅配される場合があり、口永良部島については、航路体系の関係で1日置きに配達される。郵便についても天候に左右されやすい。

## オ 社会環境

### (ア) 水道・電気

水道については、ほぼ全戸に普及しているが、施設の老朽化、水量不足の問題がある。

このため、引き続き施設の改修や施設の統廃合を進める必要がある。

屋久島の電力については、そのほぼ全てを水力発電により全地域に供給されている。口永良部島は、内燃力発電による電力が供給されている。

### (イ) 廃棄物処理

ごみについては、屋久島では、平成17年度に処理施設が整備されたところである。また、口永良部島では、収集後屋久島へ搬送して処理が行われている。

し尿については、処理体制が確立されており、収集率は100%となっている。口永良部島では収集後、屋久島へ搬送して処理を行っている。

#### (ウ) 医療

医療については、平成25年3月31日現在、病院1施設、一般診療所7施設、歯科診療所3施設がある。

口永良部島には、へき地出張診療所（町立）が1施設あり、医師と看護師が常勤している。

屋久島には、眼科・皮膚科の専門医師が少ないため、へき地診療所に鹿児島大学医学部による定期的な医師派遣が行われている。

救急医療については、県及び自衛隊のヘリコプター等により、鹿児島市の医療機関へ緊急搬送している。また、口永良部島では、医師が不在の時は看護師が本島医師との電話連絡や静止画像伝送装置によって応急処置をしている。また、救急用ヘリポートが整備されており、ヘリコプターによる緊急搬送が出来る体制が整っている。

#### (エ) 妊婦への支援等

口永良部島においては、常駐の産科医がいないことから、妊婦が島外で健康診査を受診又は出産のために必要な通院又は入院をしなければならない場合等、その交通費・宿泊費等に要する経費の一部助成を行っている。

#### (オ) 福祉

老年人口比率は、平成22年の国勢調査で、28.0%と県平均26.5%を上回っている。

老人福祉施設としては、特別養護老人ホーム、地域福祉センター、在宅介護支援センターグループホーム等が設置されている。

また、在宅の要介護者等からの総合的な相談に応じる地域包括支援センターが設置されている。

このほかの社会福祉施設としては、屋久島に保育所3か所、障害福祉サービス事業所4か所、保健センター2か所、児童館1か所、へき地保健福祉館1か所が設置されているほか、口永良部島にへき地保健福祉館が設置されている。

#### (カ) 公園

地域住民のスポーツ、レクリエーション需要の増大に対応して都市公園の整備が図られている。

屋久島町においては、町民の健康増進を促進させることを目的に屋久島町健康の森公園が整備された。

#### (キ) 教育

本地域には、平成25年4月1日現在で、公立の幼稚園1園、小学校9校、中学校4校、高等学校1校がある。一部の地域については、学校が遠距離にあるためスクールバスが運行されている。口永良部島には、高等学校等がないため、進学する生徒は島外の学校に進学している。

### カ 産業

#### (ア) 第1次産業

農業については、耕地率が2.9%に過ぎないが、海岸沿いに分散している耕地を活用し、ぼんかん、たんかん等の果樹を中心に、豆類やばれいしょ等の輸送野菜、花き、茶、畜産、ガジュツ等を組み合わせた複合経営が行われている。また、口永良部島の耕地率は3%で、放牧を活用した肉用牛の繁殖経営が行われている。

ソロヤム（やまいも）、ぼんかん、たんかん等の地域特産物を利用した農産物の加工やガジュツを主原料とする医薬品の製造が行われている。

台風、季節風等の自然災害の軽減、サル・シカ等による農作物被害の防止、輸送コストの低減、高齢化に伴う担い手の確保等の課題が残されている。

生産基盤については、ほ場整備や畑地かんがいの整備が進みつつあるが、区画整理については、県平均より低い整備水準となっている。

林業については、屋久島は、森林率が89.7%で、そのほとんどが国有林となっているが、民有林においては、スギを主体とする間伐等の森林整備、また、育成複層林整備による有用広葉樹の育成を行っている。

主な林産物は、チップ用材、建築用材、間伐材を利用した丸棒加工材等があるが、特用林産物としてシキミ、木炭が生産されている。

水産業については、漁船はほとんどが5トン未満で経営規模は零細であるが、周辺海域にトビウオ、サバ、カツオ等の浮魚の他、瀬魚資源の好漁場を有しており、漁港及び関連施設等との整備と相まって、近年、沖合漁場へ進出する傾向もみられるようになっている。しかしながら、水産資源は減少傾向にあり、魚価の低迷、後継者不足等の課題も依然として残されている。

(イ) 第2次産業

公共土木を中心とする建設業のほかに、電力資源を活用した化学工業があり、炭化珪素等を生産している。また、地場産のガジュツ・ウコンを原料とする製薬工場や天然水を製造する工場が立地しているほか、縫製工場などもある。

地場産業としては、屋久杉加工業と水産物加工業等があるが、ほとんどが小規模な企業である。

(ウ) 第3次産業

卸小売業、サービス業が中心である。

特に、観光については、世界自然遺産としての国際的な知名度により、観光地としても定着してきている一方、屋久島山岳部では、利用者の集中による植生の荒廃等が生じ、世界自然遺産の核心地域である山岳部の環境保全が課題となっている。

(7) 南西諸島地域

ア 概要

本地域は、県本土の南方約30kmに位置する竹島から南方へ約240km、東西約120kmにも及ぶ広大な海域に点在しており、三島村の竹島、硫黄島及び黒島並びに十島村の口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島及び宝島の10の有人島から構成されている。なお、臥蛇島は昭和45年7月から無人島となっている。鹿児島市から本地域の最南端の宝島までの航路時間は約14時間を要し、極めて隔絶性の強い地域となっている。

イ 自然

本地域のほとんどの島は、大部分を雑竹林におおわれた山岳に占められており、しかも、山が海岸に迫って平地に乏しいが、本地域の南端に位置する小宝島、宝島は隆起珊瑚礁の島であり、海岸周辺に比較的平坦地が多い。

気候は、黒潮の影響を受けることなどから温暖であるが、夏秋季の台風や冬季の季節風の影響を強く受ける。

なお、十島村については、平成4年4月にトカラ列島県立自然公園に指定されている。

ウ 沿革

この地域の島々の記事が文献に現われてくるのは極めて古く、日本書紀である。戦国時代以後島津氏の支配になったが、その間行政的にほとんどかえりみられなかった。



島別人口等の状況

島名	村名	面積(km <sup>2</sup> )	人口 (H22年国調・人)
竹島	三島村	4.2	83
硫黄島	〃	11.65	127
黒島	〃	15.37	208
口之島	十島村	13.33	138
中之島	〃	34.48	143
平島	〃	2.08	81
諏訪之瀬島	〃	27.66	52
悪石島	〃	7.49	72
小宝島	〃	1.00	54
宝島	〃	7.14	117
地域計	2村	124.40	1,075

その後の状況は、明治8年にこれらの島々は川辺郡に属することになり、明治18年には上三島と下七島は分離されて、上三島は大島郡金久支庁西之表出張所に、下七島は直接金久支庁の所管に属した。

さらに明治22年には、再び上三島と下七島を合併して十島村とし、大島支庁が管轄した。

戦後再び下七島（現在の十島村）は分離され、沖縄、奄美群島とともに米国の軍政下におかれることとなり、上三島だけが三島村として発足した。

下七島は昭和27年の日本復帰までの6年余りにわたり行政分離が行われたため、自然条件の厳しさとあいまって疲へい窮乏は著しかった。

昭和45年7月十島村の臥蛇島は生活環境の過酷さから全島民が集団移住し無人島となった。昭和48年には、当地域は大島郡から鹿児島郡へ区域変更があった。

なお、三島村、十島村とも役場本庁は鹿児島市にある。

## エ 交通・通信

本土等と結ぶ交通体系については、鹿児島市と三島村の各島を結ぶ航路（貨客船、1,196 t、週3航海）と鹿児島市と十島村の各島及び名瀬市を結ぶ航路（貨客船、1,391 t、週2航海）がある。物資の流通、本土との往来、医師の巡回診療等、住民生活はすべてこの定期航路に依存しており、その果たす役割は極めて大きい。また、これらの航路は外海を長時間にわたって航行するため、運航費がかさむにもかかわらず航路需要が限られているので、企業としての航路経営は困難であり、村営により運航がなされている。

漁港については、西之浜漁港ほか2漁港があり本土（鹿児島市）と十島村とを結ぶ定期船の発着及び日常生活物資の搬入基地として重要な役割を果たしている。

定期船の寄港港については、全島の定期船接岸が実現したが、防波堤等に暫定的に接岸するなど整備途中のものも多い。

航空路については、硫黄島に三島村が管理する薩摩硫黄島飛行場（非公共用）があるが、定期便は運航されていない。

### 航路現況

平成25年4月1日現在

航 路	船 舶 名	ト ン 数 ( t )	航 路 距 離 ( km )	所 要 時 間	旅 客 定 員 ( 人 )	運 航 回 数
鹿児島 ～ 竹島 ～ 硫黄島 ～ 大里(黒島) ～ 片泊(黒島)	フェリー みしま	1,196	153.0	5:35	200	3 / 1 週
鹿児島 ～ 口之島 ～ 中之島 ～ 平島 ～ 諏訪之瀬島 ～ 悪石島 ～ 小宝島 ～ 宝島 ～ 名瀬	フェリー としま	1,391	宝島便 345.0 名瀬便 435.0	宝島便 13:15 名瀬便 16:30	200	2 / 1 週 (宝島便1便 名瀬便1便)

※平成25年7月1日から、週2便とも名瀬便化された。

道路については、黒島に唯一の県道(9.5km)があり、改良が進んでいるが、急勾配、急カーブで幅員が狭い区間も一部残る。

島内交通については、島内に公共交通機関がなく、自家用車による移動が中心である。

情報通信基盤については、三島村において、平成22年度に国の補助事業を活用し、本土と竹島、硫黄島、黒島を結ぶ海底光ケーブルを敷設するとともに、村役場と各島の公共施設を結ぶ地域公共ネットワークを構築し、島内に超高速ブロードバンドが整備された。また、平成23年度から、公設公営方式によるインターネットサービスの提供を開始した。十島村では、中之島、悪石島、宝島が海底光ケーブルで本土と結ばれているが、平成20年度、21年度に国の補助事業を活用し、これら3島と口之島、諏訪之瀬島、平島、小宝島を新たに無線で接続するとともに、村役場と各島の公共施設を光ファイバで結ぶ地域公共ネットワークを構築し、島内に無線方式(FWA)による高速ブロードバンドを整備した。また、平成22年度から、公設公営方式によるインターネットサービスの提供を開始した。両村では、これらの情報通信基盤を活用

して、議会中継や遠隔医療、港湾監視などの各種システムを運用し、住民サービスの向上を図っているが、公設による情報通信基盤等の維持管理費に対する負担軽減が求められている。

携帯電話については、居住地域のほとんどがサービスエリアになっており利用可能だが、一部に不感地域が存在している。

テレビについては、地上波テレビ放送のデジタル化に対応するため、既存の共聴施設の改修やデジタル化に伴い発生した「新たな難視」地区解消のための中継局の新設などを行い、難視地区はほぼ解消しているが、季節性の要因等による受信不良が発生している。

郵便については、竹島、硫黄島、黒島、口之島、中之島、宝島の6島については、郵便局が設置されているが、残り4島については役場駐在員等が集配している。

新聞については、定期船の運航回数の関係により数日分まとめて配達されている。

## オ 社会環境

### (ア) 水道・電気

水道については、簡易水道及び飲料水供給施設がほぼ全戸に普及しているが、地形、地質の特性から水源や水質に恵まれておらず、淡水化施設の維持経費の増大、施設の老朽化、水源の水量減少による新たな水源の確保が課題となっている。

電力については、各島に設置された発電所により、全地域に電力が供給されている。なお、一部の島ではイベントの開催や公共施設利用による一時的な電力需要の増大に対し、移動電源車の配置や一般家庭の節電で対応している。

### (イ) ごみ・し尿

本地域の島々が広大な地域にわたって点在しているため、全島にわたる一元収集・処理は困難である。各島においてごみは分別収集を図り、焼却施設及び生ごみ高速発酵処理等を進めており、十島村では、平成20年度から資源ゴミと併せて、粗大ゴミの島外排出処理を行っている。

し尿についてはバキュームカー等の利用により自家処理が解消されている。また、三島村においては、全島に合併処理浄化槽が設置された。

### (ウ) 医療

本地域は長年医師が常駐していない状態が続いていたが、平成12年度からは三島村の硫黄島に、平成14年度からは十島村の中之島に、それぞれ医師1名が常駐している。これに加え、本地域のへき地医療拠点病院である鹿児島赤十字病院から、各島のへき地診療所へ医師派遣が行われているほか、鹿児島大学医学部・歯学部、県歯科医師会の協力を得て眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科の特定診療科及び歯科の巡回診療も実施している。

また、本地域は島数が多く船便の都合で医師が各島に滞在できる時間が限られるので、定期船の特別ダイヤの編成や巡回診療船を兼ねた行政連絡船の配置などにより診療の円滑化を図っている。

へき地診療所は全島に整備され、それぞれ看護師が配置されている。

救急医療については、鹿児島赤十字病院の医師とへき地診療所の看護師との連携で遠隔医療システムによる応急処置のほか、重症の救急患者は県や自衛隊のヘリコプター等により鹿児島市の医療機関へ緊急搬送している。ヘリポートについては、硫黄島と諏訪之瀬島の飛行場を含め全島に整備されている。

健康管理体制については、鹿児島市内のそれぞれの役場に、三島（2人）、十島（3人）の保健師が勤務しており、保健所と連携をとりながら各種健診や保健指導を行っている。

### (エ) 妊婦への支援等

常駐の産科医がいないことから、妊婦が島外で健康診査を受診又は出産のために必要な通院又は入院をしなければならない場合等、その交通費・宿泊費等に要する経費の一部助成を行っている。

### (オ) 福祉

本地域の老年人口比率は、平成22年の国勢調査で、32.7%と県平均26.5%を上回っている。

地域の要援護高齢者及びひとり暮らし高齢者にホームヘルパーを派遣し生活支援サービスを行っている。また、高齢者が自立生活の維持や地域との交流、安否確認など在宅福祉の推進のため老人会食サー

ビスを実施しているものの、デイサービスはマンパワーの確保が困難なためできない状況にある。さらに、老人福祉施設は、宝島に小規模多機能型居宅介護事業所が設置されている。

#### (カ) 教育

本地域には、平成25年4月1日現在で、小学校11校、中学校11校が設置されているが、いずれも小中学校併設で小規模である。また、高等学校はなく、生徒は島外の学校に進学している。

### カ 産業

#### (ア) 第1次産業

農業については、孤立小型の離島で、平地に乏しく、耕地は狭く急峻で、農家の高齢化も進んでいる。農業生産額の約9割を肉用牛の生産が占めており、地域の基幹産業となっている。

なお、近年においては、農家の経営安定化を図るため、優良繁殖雌牛を導入し、人工授精による母牛集団の改良も進められており、子牛価格の本土との価格差が縮小されつつある。

この他、びわ、たんかん、サンセベリア等が生産されている。また、耕作放棄地を作付け可能な農地に転換させるための取組なども始められている。

農産物加工については、落花生やつわ、たけのこの等地域特産物を利用した加工品が製造されている。

生産基盤の整備により、温暖な気候を生かしたびわの産地づくりを進めているが、高齢化により生産量が減少している。

林業については、天然広葉樹林と竹林が大部分であり、これらを利用して、一部地域でしいたけの生産が行われているほか、硫黄島で椿の実、竹島、硫黄島、黒島、諏訪之瀬島、悪石島では、たけのこの生産が行われている。

水産業については、漁船はほとんどが5トン未満で経営規模は零細であるが、周辺海域にトビウオ、キハダマグロ、カツオ等の優良な漁場を有しているため、一部の地域においては、水産加工品の開発など積極的な取り組みが見られる。しかしながら、水産資源は減少傾向にあり、魚価の低迷、後継者不足等の課題も依然として残されている。

#### (イ) 第2次産業

第2次産業については、港湾・漁港・道路の整備等公共事業による建設業のウエイトが高い。

#### (ウ) 第3次産業

本地域は、美しい海、優れた自然景観、海中温泉や砂蒸し温泉などの多様な温泉、トカラ馬や野生の黒毛和牛など他に見られない特異な生態系等の優れた自然を有しており、十島村はトカラ列島県立自然公園に指定されている。また、俊寛伝説や仮面神ボゼ祭り等の歴史・文化、大名たけのこや伊勢エビ、夜光貝、山羊汁等の食、ミシマカップヨットレース、ジャンベワークショップ、海の学校、トレッキングツアー、俊寛祭り、特攻平和記念祭、トカラ列島マラソン等のイベント開催など、特色ある観光資源を有している。

個人客やグループ客等の旅行形態に対応し、地域特有の動植物や自然環境を生かしながら、体験型観光ツアーの充実などを図る必要がある。また、観光協会の設立等による観光客の受入体制の整備も課題である。



